

神戸空港のラグーンで実施したウミガメ保護についての報告

NPO 法人 日本ウミガメ協議会

2007年7月から12月にかけて、神戸空港島にあるラグーンで実施した、アカウミガメの保護活動について報告します。

1 本活動の目的

(1) 危険な海域での事故死を防ぐ

大阪湾や瀬戸内海は船舶の航行が多い上、イカナゴ漁など漁業活動が活発です。そのような危険な海域である大阪湾や播磨灘にウミガメが入り込むと、高い頻度で事故に遭遇し、死亡する確率が高いことが明らかになってきました。例えば、2006年に日本ウミガメ協議会は大阪湾と播磨灘で16個体のウミガメを確認していますが、その内、8個体は既に死亡しており、なかには体表にキズがついているものもありました。一方、当会では2003年と2004年に明石や小豆島からウミガメを放流し、人工衛星で追跡していますが、無事に紀伊水道から太平洋に出たことを確認できたのは4個体中1個体しかありませんでした。以上の事実より、大阪湾や播磨灘に入り込んだウミガメは、安全な場所に確保するのが人道的な処置と考えました。



保護されたアカウミガメ

(2) 捕まったウミガメの健康を確認して放流する

全国各地で漁師さんの網などにウミガメがかかり、収容されることがあります。そのようなウミガメは調査研究の大切なデータを提供してくれるので、当会では極力調査に出かけ、標識を装着し放流してきました。その中には健康状態に問題があり、放流するのが心配されるウミガメもいます。そこで一時的にラグーンへ確保し、健康状態を確認した上で外洋に放流しようと考えました。

(3) 市民にウミガメのおかれた現状を理解していただく

神戸のような都市に生活していると、大自然を忘れがちです。神戸空港の広いラグーンでウミガメを探してもらい、少しでも自然に近い状態のウミガメを観察し、ウミガメに親しみを感じていただきたいと考えました。

2 これまでの経緯

(1) 市民からの意見を聞く会の開催

前述したとおり、当会で得られた様々な情報から、大阪湾や播磨灘に侵入したウミガメは事故死する確率が高いことが予想されました。しかし、野生動物を一時的でも拘束することに対する批判も当然予想されました。そこで、市民の方々の意見をきくための会議(リバイブウミガメ戦略会議)を神戸市(2/10)と淡路島由良(5/27)で開催しました。その結果、この活動に対する賛同者が多いことを確認しました。



リバイブウミガメ戦略会議(2/20)

(2) ウミガメの収容

2007年に神戸空港で保護したウミガメは以下の6個体です。

標識番号	愛称	捕獲日	収容日	捕獲場所	性	直甲長(収容時)
53377, 53388	コベラ	7/19	7/27	紀伊水道	不明	716mm
55201	玲海(れみ)	7/20	7/27	紀伊水道	不明	725mm
53376	渚	7/26	7/27	大阪湾	雄	848mm
55202	港	8/2	8/2	大阪湾	雄	882mm
53374, 53375		11/5	11/5	神戸沖	不明	847mm
43837		11/6	11/6	神戸沖	不明	765mm

なお、 の個体は口に傷が見られ、また の個体は左後肢が欠損していました。



左後肢が欠損した 55201 (れみ)

(3) 観察会を兼ねた健康診断の実施

ウミガメを収容した後、カメをダイバーによって取り上げて8/19、9/30、11/4、12/8(放流日)に健康状態を調べました。調査項目は甲長や体重の測定と、血液を採取して血糖値など31項目を測定しました。また、取り上げた際には、市民に公開し、講習会などを実施しました。



ラグーン内を泳ぐアカウミガメ

(4) 放流

外洋への放流は12/8に紀伊水道で行いました。この日のラグーンの水温は16度で、アカウミガメの生息する温度としてはやや低い水温です。また、周囲の大阪湾の水温は18-19度で、生息するにはやや低い水温でした。このように水温が下がるまで放流日を延ばしたのは、放流されたウミガメが再度大阪湾に回遊し戻ってくることを防ぐためです。明石で1999年に産み落とされた卵から孵化した子ガメを生育させ甲長66cmに育ったカメを2個体、2003年の夏に放流した経験がありますが、その際、大阪湾の水温が19度以下にならないと太平洋に出て行かないことがわかったからです。

放流は東経135度03.575分、北緯34度15.449分の和歌山県友が島の南の海上まで2隻の船で搬送し、15時に行いました。6頭とも無事に海に潜っていきました。その後の行動が心配されましたが、16日、高知県室戸市椎名の大敷網で標識番号43837が発見されました。この個体の再発見の場所を見る限りでは、当方の予想通りのようです。

3 結果と市民の反応

(1) 保護中の管理と健康状態

ラグーンで保護している間、餌を与えませんでした。これは、ウミガメがヒトに慣れてしまい、放流後に自然の餌を食べなくなったり、ヒトに近づいてしまうことを防ぐためです。ラグーンは外海とつながっているため、貝やカニ、魚が育っており、それらが餌となることを期待していましたが、実際、それらを食べた痕跡も確認で



ウミガメの放流の様子

きました。ただし、体重の低下がすべての個体で見られ、また、血糖も正常な範囲内ではあるが低下しており、保護している間の栄養環境に問題がある可能性が明らかになりました。健康には問題がないと考えられる範囲内の変化ではありますが、よりよい環境で保護するには今後検討する必要があるようです。

また、口に障害のある個体と左後肢の欠損した個体は、観察によりとりあえずその行動から生きるのに支障はないと判断し、放流しました。また、後肢の欠損個体については、レントゲンによって、かなり以前に大腿骨の途中から切断されたことが確認でき、サメによって障害を受けたと考えられました。

(2) 市民の反応

保護の期間に千人以上の市民がラグーンを訪れ、ウミガメを観察しました。当会から派遣したアルバイトからの報告によれば、様々な思いでウミガメを見に来る市民がいたことがわかりました。自然が好きでたまに水面から頭を出すウミガメをみにだけ来る人、ここで子供とウミガメを探していて家族の大切さが分かったという人、安産祈願に来られる人、さらに一人で癒しを求めてこられる人もたくさんおられました。当方が思っていた以上に、多様な印象をもって市民がウミガメと接していたことが明らかになりました。



カメの甲長を測る子供

(3) 今後の予定

今回の活動によって、大阪湾に進入してきた少なくとも6個体のアカウミガメを保護することができました。通常、この海域で夏から秋にかけて回遊していると、かなりの確率で事故死することが予想されることから、これらを無事に保護することはアカウミガメの保護に実質的な効果があったことは確かです。徳島県の砂浜はかつて日本有数の産卵地でした。しかし、現在では昭和40年代の数十分の一に産卵頭数が減っています。ここ数年は産卵に来ている個体は10頭前後と予想されます。この減少原因の一つに瀬戸内海における事故死があると考えておりますので、今回のような保護が効果を奏すれば、それらの産卵地での産卵も増えてくることが期待されます。また、明石市の海岸などでの産卵も復活することが期待されます。

神戸空港のラグーンは、ウミガメを極めて自然に近い環境で飼育することができ、本活動に非常に適している施設でした。この施設の使用を許していただいた神戸市には感謝の意を表します。

大阪湾のような船舶の航行の激しい海域に侵入したウミガメを一時的に避難させる試みは、世界で初めての試みです。一方、健康状態に問題のあるカメを収容し、治療する施設は米国などには存在し、活発に保護活動をおこなっていますが、日本にはこのように海洋性野生動物を治療する施設はまったくありません。神戸や関西が海洋動物の保護に関わるという発想は、これまで市民にも行政にもありませんでした。しかし、今回のウミガメ保護を通じて、地球環境問題に貢献する道も関西にあることを行政や市民の皆様に理解していただきたいと思います。

本活動には神戸市、(財)大阪湾ベイエリア開発推進機構、カネテツデリカフーズ(株)や多くの神戸市民の方より支援を受けておこなっております。今後も、この活動を継続していくために、さらに多くの方々のご支援をお願いいたします。(文責 亀崎直樹)